

第 11 回

オペラの祭典 V 華麗なるフランスのエスプリ 曲目解説とオペラ「カルメン」のあらすじ

第 1 部『名曲アラカルト』曲目解説



マルティーニ

マルティーニ(1741~1816)作曲

「Plaisir d'Amour 愛の喜びは」

18世紀フランスの有名な恋愛歌曲。題名は「愛の喜び」という意味だが、過ぎ去った恋の思い出と、その後に残る深い悲しみが歌われている。「愛の喜びはひとときでも、愛の悲しみは一生続く」という歌詞に象徴されるように、美しい旋律の中に切なさや哀愁が込められている。穏やかに流れるメロディーと、フランス歌曲特有の繊細な言葉の響きが特徴となっている。



トスティ

トスティ(1846~1916)作曲

「La chanson de l'adieu 別れの歌」

イタリアの作曲家トスティが、フランス語の歌詞に作曲したフランス歌曲。愛する人との別れを前にした切ない思いが、美しく穏やかな旋律の中に描かれている。感情を激しく表現するというよりも、静かに語りかけるように心情が綴られているのが、この曲の大きな魅力である。言葉の柔らかな響きと繊細なニュアンスが、別れの寂しさや余韻をより深く感じさせる。



レイナルド・アーン

レイナルド・アーン(1874~1947)作曲

「À Chloris クロリスに」

17世紀の詩人テオフィル・ド・ヴィオーの詩に、アーンが曲を付けたバロック様式を彷彿とさせる優美でシンプルなフランス歌曲。愛する人への誠実な愛を歌った名曲であり、ギリシャ神話の春と花の女神「クロリス」を題材にしている。



シャルル・グノー

シャルル・グノー(1818～1893)作曲
オペラ「ロミオとジュリエット」より
「Je veux vivre 私は夢に生きたいの」

フランスの作曲家シャルル・グノーが、ウィリアム・シェイクスピアの戯曲『ロミオとジュリエット』を原作に描いたオペラの1曲で、1幕最初のジュリエットの登場シーンで歌われる3拍子のアリア。まだ恋を知らないジュリエットが、人生の春を謳歌して無邪気に歌う。恋に恋をしているような夢見心地な内容である。



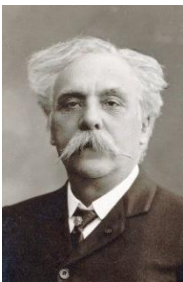
サン=サーンス

カミーユ・サン=サーンス(1835～1921)作曲
「Une flûte invisible 見えない笛」

サン=サーンスが1885年にフランスの文豪ヴィクトル・ユゴーの詩に作曲した独唱曲。フルートのオブリガートを伴っている。自然の中で聞こえてくる「見えない笛の音」に惹かれ、平和や愛を歌い上げる。曲想は穏やかで透明感があり、ドビュッシーなどの印象派的な雰囲気も感じさせる。

オペラ「サムソンとデリラ」第2幕より
「Amour! viens aider ma faiblesse 愛の神よ！私を助けにきておくれ」

ペリシテ人の女性デリラがペリシテの敵である怪力男のサムソンへ復讐心を持ちつつ、愛の神（アムール）に祈り、サムソンを籠絡するための力を懇願する場面で歌われる。最高音からの急下降のスケールや、最低音域で歌い収めるところなど、メゾソプラノの魅力をも最大限に生かした情熱的で誘惑的な名アリア。



フォーレ

フォーレ(1845～1924)作曲 2つの二重唱曲 OP10-1 より
「Puisqu'ici-bas toute âme この地上ではどんな魂も」

ヴィクトル・ユゴーの詩にフォーレが曲を付けた、2人のソプラノ（または女声合唱）とピアノのための二重唱曲。

若き日のフォーレが、恋人マリアンヌ・ヴィアルドに献呈した、愛の歌や輝き、香りをテーマにした美しい小品である。2人の歌手が掛け合い、あるいは重なり合いながら、互いに愛を分け与えることの尊さを描いている。



アンドレ・メサジェ(1853～1929)作曲

オペラ「お菊夫人」より「Ecoutez, c'est le chant de cigales お聴きなさい、蝉たちの歌を」

原作者ピエール・ロティの「お菊さん」は、1885年に長崎に寄港したフランス海軍士官（ロティ自身）が現地の仲介人を通して、「お菊さん」という少女と3か月間の契約結婚（現地妻）をするという日記風な小説。これを基にして、メサジェが作曲した。第3幕の長崎の夏祭りの場でお菊さんがセミの声を聴きながら、「恵みの太陽が輝く日～ お聴きなさい 蝉たちの歌を」と、異国の恋人との別れを想い、自らの運命と愛を歌う。

アンドレ・メサジェ



レオ・ドリーブ(1836～1891)作曲

オペラ「ラクメ」より「Dôme épais le jasmin 花の二重唱」

19世紀後半のヨーロッパで流行した「オリエンタリズム（異国趣味）」の流れの中で生まれた作品。インドの寺院の司祭の娘ラクメと侍女のマリカが、小川のほとりでジャスミンとバラが咲き乱れ香る様子を優雅に歌う。「コッペリア」などバレエ音楽でも名を馳せたドリーブの踊るようなリズムや色彩感がこの曲でも味わえる。

レオ・ドリーブ

第2部 オペラ『カルメン』ハイライトのあらすじ

※ハイライト構成の関係上、通常公演とは曲順が変わっている部分があります。



舞台は 1820年頃のスペイン セビリア

衛兵のホセは、ある日、タバコ工場の休憩中に外に出てきた美人で魔性の女と噂されているカルメンと出会い、彼女の恋の歌と妖艶な眼差しに、興味がないふりをしながらも心は魅了されていく。そして彼女から渡された花をそっとポケットにしまうのであった。（ハバネラ）

そこへ、幼なじみでお互いに淡い想いを寄せ合っているミカエラが、ホセの母の手紙を携えて現れる。ミカエラから母の伝言を聞いたホセは、母への愛で心がいっぱいになり、カルメンへの想いを忘れかける。（ミカエラとホセの二重唱）

二人のやりとりを影から見ていたカルメンが、自分と一緒に盗賊団に入らないかとホセを誘惑する。盗賊になどなれないと立ち去るホセ。そこへ盗賊仲間のダンカイロ、レメンダード、フラスキータ、メルセデスの4人がやって来る。男達が盗みの仕事の話を持って来るが、カルメンは、今回は行かないと言う。4人が理由を聞くと、今、恋をしているから無理と。(五重唱)

そこへ闘牛士のスター、エスカミーリョが現れ、女達の中からカルメンに目を付け自分の勇ましさを語りながら誘惑するが、カルメンは応じない。
(闘牛士の唄)

エスカミーリョと連れ立って4人が去る中、カルメンは一人残り、そこへ再びホセが現れる。以前渡された花の香りを嗅ぐたびにカルメンへの想いがつのり、君を忘れることなどできないと切々と想いを語る。(花の歌)

ホセは身分を捨て、カルメンと共に生きることを決意して盗賊団に入る。そのことを知ったミカエラが、勇気を振り絞って山奥の盗賊団のアジトまでやって来る。(ミカエラの Aria)

母の思いや病状を知らされて動揺するホセ。そんなホセに嫌気が差し、恋心が冷めていくカルメン。彼女は新しい恋人にエスカミーリョを選ぶのだった。

エスカミーリョの闘牛の試合の日、闘牛場の外で待ち伏せしていたホセ。カルメンにしつこく復縁を迫るが…(二重唱、フィナーレ)